

「大坂の陣と真田幸村」

大阪城天守閣 館長 北川 央さん

大坂の陣は勝ち戦？

幸村はなぜ大坂方についてのか、豊富な史料から考察する新たな視点！

「○資料」は講師が配布した資料の内容

「○説明」は会場での講師の講話の概要

1. 豊臣秀吉の遺言～関ヶ原前夜の真田家

○資料

・豊臣秀吉は慶長3年（1598）8月18日に伏見城で病没。これに先立ち、秀吉は、自らの死後、徳川家康が政権担当者として伏見城で政務を執り、前田利家は大坂城で秀頼の後見をするという体制で、豊臣政権を運営するよう遺言。このとき、家康・利家はすでに老齢であったため、兩人にもし万一のことがあった場合には、それぞれ徳川秀忠・前田利長にその地位を承継することも確認される（史料1）。秀頼はこの遺言の旨にしたがい、慶長4年正月10日に伏見城から大坂城に移る。大坂城には新たな曲輪が建設され、その防衛力がさらに高められた（史料2）。

・この伏見城一家康、大坂城一利家体制のもと、豊臣家（前田家）と親しい西国大名たちには伏見城下に、徳川家に近い東国大名たちには大坂城下に住むように命じられた。西国大名と家康、東国大名と利家が、それぞれ互いに監視・牽制し合うことで、秀吉は自らの死後、豊臣政権を維持しようと考えた（史料3・4）

・ところが、秀吉が亡くなって間もなく利家が病身となり、秀吉の描いた政権維持構想は脆くも崩れ去る。慶長4年閏3月3日、大坂城下・玉造の自邸で利家が亡くなると、秀吉の遺言に従って利長がその地位と役割を継承したが、家康の強い勧めもあって、同年8月28日に金沢へと下る。すると、利長帰国の際をねらって、同年9月28日に家康が伏見城から大坂城西の丸へ入り、それまで西の丸にいた北政所お祢（高台院）は、その前々日に「京都新城」（三本木屋敷）へ。

この家康の大坂入城にともない、伏見城下にいた大名たちも悉く大坂城下に移り住み、豊臣政権は大坂城に一元化（史料5・6）。けれど、関ヶ原合戦に勝利した家康は、秀頼に戦勝報告したのち、しばらくは大坂城西の丸に居を定めたものの、戦後処理が済むと慶長6年3月23日に伏見城に移ってここで政権運営を担当し、やがて同城で慶長8年2月12日に征夷大將軍の宣下を受けて幕府を開く。

・信州上田城主真田昌幸は、その領国が東国にあったにもかかわらず、西国大名として扱われていることに注目。

○説明

一般に、秀吉は五大老・五奉行を定めて自らの死後の豊臣政権を合議制で運営させようとしたと言われ

ているが、五大老の中でも家康と利家は別格の扱いで、「二大老制」と呼んでも差し支えないくらい重責を負う立場にあった。もし家康が亡くなれば秀忠、利家がなくなれば利長がその地位と役割を継承することになっていた。

秀吉は、自らの死後、豊臣政権に対し謀反を起こすのは家康に違いないと思っていたので、これを抑えるため、伏見には西国大名、大坂には東国大名と、全国の大名を二つに分けて屋敷を構えさせた。しかしこのプランは、利家の死によって呆気なく崩れ、家康が大坂城へ乗り込んできて、それまでは利家が果たしていた秀頼の後見役も家康が担うようになった。

昌幸は東国大名であるから、本来は大坂城に屋敷を持つべきなのに、西国大名の扱いで伏見城にいた。家康が伏見城から大坂城に移ると、他の西国大名同様、自分も大坂城へ移ると信幸宛の書状で語っている。

2. 九度山における真田昌幸・幸村

○資料

・慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦では昌幸・幸村が西軍、信幸は東軍に与し、昌幸・幸村は秀忠率いる徳川本隊を上田城に釘付けにして、関ヶ原本戦に遅参させる（第二次上田合戦）。しかし関ヶ原本戦は東軍の大勝利に終わる。

・戦後、昌幸・幸村は、信幸の嘆願によって助命され、高野山に配流。真田家と師檀関係にあった蓮華院に蟄居するが、のち山麓の九度山に移った。付き従う家臣は池田長門守以下 16 名。

・昌幸は正室山之手殿を上田に残してきたが、幸村は妻子を連れての蟄居生活。九度山で 3 人の女子、2 人の男子に恵まれる。

・信之（信幸から改名）は、関ヶ原合戦後、従前の沼田領に加えて父昌幸の旧領も宛行われ、上田城主となる。

・昌幸・幸村らの生活は兄信之（上田藩）から送られてくる「毎年の合力」と、家臣らから届く「臨時の合力」で維持されたが、それでは全然足りず、多額の借金に苦しむことになった（史料 7・8）。

・慶長 16 年（1611）6 月 4 日に 65 歳で昌幸が亡くなり、その一周忌法要が済むと、16 人の家臣のほとんどが上田に帰り、信之から知行を与えられて、上田藩士に復帰。

・幸村のもとに残ったのはわずかに 2、3 名家臣のみ。国許からの音信も途絶えがちに。幸村は法体となり、「真田左衛門入道」「好白齋」を名乗った（史料 9～11）。

・慶長 19 年 10 月、豊臣家からの招きに応じ、大坂城入城を果たす（史料 12～14）。

○説明

九度山での蟄居生活は困窮をきわめ、送金を頼んだり、生活に疲れたと弱音をはいたりしている。足利義輝の孫にあたる西山左京に焼酎を送ってほしいと頼んでいるが、西山左京は当時京都にいたので、幸村は京都とも連絡をとっていたことがわかる。幸村というと「赤」のイメージがあるが、出家ののちは「好白齋」と称しており、「白が好き」と名乗っているのはおもしろい。家康側近の日記によれば慶長 19 年 10 月 14 日に浜松に到着した家康のもとに京都所司代からの手紙が届き、浪人がどんどん大坂城へ入城しており、その中に幸村も含まれていることが伝えられている。幸村に対しては、豊臣家から黄金 200 枚（現在の金額では 6 億円程度）、銀 30 貫目（現在の金額で 1 億 5000 万円程度）が当座の支度金として遣わされた。この多額の支度金も幸村が大坂城へ入城した理由の一つではないかと思われる。

3. 大坂城に入城した真田幸村

○資料

- ・大坂入城の時点での真田幸村の武将としての評価（史料 14・15）。
- ・父昌幸による赦免工作（史料 16・17）。
- ・冬の陣と夏の陣の間に行なわれた幸村への寝返り工作（史料 18～20）。

○説明

真田の大坂入城を伝えられた家康は、使者のところまで出てきて、入城したのは「親か子か、親か子か」と尋ねた。そのとき戸に手をかけていたが、戸がガタガタと音を立てるほど、家康はふるえていた。使者から、昌幸は既に亡くなっており、入城したのは息子の幸村だと聞いて家康はホッと胸を撫で下ろしたという。こうした逸話は、昌幸は恐れられていたものの、冬の陣勃発の時点では、幸村の武将としての評価はいまだ未知数だったことを示しているのであろう。

一般に、大坂入城は豊臣への恩義に報いるためといわれているが、昌幸は本多正信を通じて家康に赦免工作を行っていた。信綱寺宛の手紙ではまもなく許されるだろうと書いており、案外気楽に構えていたことがわかる。これよりしても、真田が豊臣一筋だったとは思われない。昌幸が亡くなったので、信之は父昌幸の葬儀を出そうと、本多正信を通じてお伺いをたてたが、昌幸は「御公儀御憚りの仁」であるからと、葬儀を営むことを許されなかった。徳川幕府、特に秀忠にとって、自らの武将としての経歴に大きな傷をつけた昌幸は許しがたい人物だった。

冬の陣の後、徳川幕府は幸村に対し、十万石、さらには信濃一国を与えるとの条件を示して徳川への寝返り工作を行っている。冬の陣の真田丸の攻防戦で、さすがは真田、昌幸の子だとの評価を獲得したから、このような工作が行われた。しかし、幸村はきっぱりと断っている。九度山での貧しく、辛い生活から幸村を救い出してくれたのは豊臣秀頼。しかも秀頼は、幸村に真田丸を任せ、再び武将としての誇りを取り戻させてくれた。幸村は秀頼に深く感謝し、恩義を感じていた。

4. 関ヶ原合戦後の豊臣家

○資料

- ・通説では、慶長 8 年（1603）2 月 12 日徳川家康が征夷大將軍になるとともに、秀頼は摂津・河内・和泉三ヶ国 60 数万石の一大名に転落したというが、果してそれは事実か。
- ・文化 9 年（1812）成立の『廢絶録』には、摂・河・泉 65 万 7400 石の大名豊臣秀頼が、元和元年（慶長 20 年、1615）5 月 8 日自害とある（史料 21）。『徳川除封録』にも同様の記述あり（史料 22）。←江戸幕府としては、一大名たる豊臣家が幕府に対して反乱を企てたという立場をとっているのだから当然か。しかし、廢絶した大名・旗本の家譜を集成した『断家譜』（文化 6 年成立）には豊臣家の家譜は収録されていない。
- ・大坂城の秀頼のもとには、毎年勅使・親王・公卿・諸門跡が年賀の礼に下向し（史料 23・24）、それは大坂冬の陣が勃発する慶長 19 年まで続く（史料 25～27）。
- ・それに加えて、諸大名からは年頭や歳暮、各節句ごとに贈り物が届けられた（史料 28～32）。
- ・また秀頼は、管見の限りでも東は信濃の善光寺から西は出雲大社に至る範囲で 100 ヶ所以上の寺社に

ついで堂塔・社殿を復興。そもそも国家的祭祀にかかわる寺社の保護は天下人に課せられた重要な責務で、これらの寺社復興事業では当地の大名を奉行に任命している（史料 33・34）。

・慶長 17 年から、秀頼は知行宛行状を発行。家臣の多くは大坂の陣に参戦し、戦死したため現存文書は少ないが、現在知られているわずか 6 通からでも、秀頼の所領が摂河泉の他、山城や近江・備中に広がっていたことがわかる（史料 35・36）。秀頼直臣団であった「大坂衆」の所領で判明しているものを加えると、その範囲はさらに大和・伊勢・美濃・丹波・讃岐・伊予にまで広がりを見せる。

以上諸点よりして、関ヶ原以降の秀頼を摂・河・泉 60 数万石の一大名とみなす、これまでの通説には大いに疑問あり。

○説明

大坂の陣は最初から豊臣方が負けるとわかっていた戦いだったのだろうか、幸村は豊臣方が負けるとわかっているが死に場所を求めて参戦したのだろうか。通説では、徳川幕府のもとで大坂周辺の 65 万石余を領する一大名となった豊臣家であるが、過去の栄光を忘れられず、一大名であるにもかかわらず、徳川幕府の命に従わなかったため、ついに幕府は豊臣家を滅ぼすことになったと理解されている。しかし、豊臣秀頼を 65 万石余の一大名とする通説の根拠となったのは『廢絶録』という史料で、これは大坂の陣から 200 年も後に編纂されたもの。慶長期の当時の史料からは、通説とはまったく違う秀頼の姿が浮かび上がる。たとえば、家康が征夷大将軍になり、徳川幕府を開いた後も、秀頼のもとには、毎年正月になると天皇の使いである勅使や親王・公卿・諸門跡が残らずあいさつに訪れている。これが大坂冬の陣が勃発する慶長 19 年まで続く。秀頼と諸大名が交わした手紙を見ても、書札礼や言葉づかいから、秀頼は大々名よりも遥か上位にあったことが明らかで、秀頼は特別な存在だったことがわかる。

秀頼は全国の寺社の復興をしているが、天下国家の安全を祈る寺社の保護は本来天下人がやること。それを秀頼がやっていること自体、たいへん興味深い。さらにこの寺社復興事業では現地の大名を奉行に任命しており、秀頼と大名たちの間に明瞭な上下関係が確認できる。

5. 摂関家の当主・豊臣秀頼

○資料

・慶長 7 年 12 月には豊臣秀頼を関白に、徳川家康あるいは秀忠を将軍にすることが一旦朝廷で内定していたらしい（史料 37・38）。これは実現せず、慶長 8 年 2 月 12 日に徳川家康が将軍となるが、そこには豊臣家=関白、徳川家=将軍が併存できるとの認識が示されていることに注目しなければならない。我々はどうしても江戸時代の徳川幕府による全国支配をもとに将軍という存在をイメージしがちであるが、決して将軍は絶対的存在ではなかったものであり、将軍になったからといって、それがそのままこの国の支配者になることを意味したわけではなく、秀頼が関白になる道が閉ざされたわけでもない。

・また、秀吉は公家の家格に倣い、武家にも家格制を導入。豊臣本家は、近衛・鷹司・九条・二条・一条の五摂家に相当する摂関家に位置付けられ、徳川・毛利・上杉・前田・小早川といった豊臣政権の大老の立場にあった大名は、久我・転法輪三条・西園寺・徳大寺・菊亭・花山院・大炊御門の七清華に相当する清華家として位置付けられた（史料 39～44）。これら秀吉の定めた大名家の家格は秀頼時代になっても厳然として残り、老齢の家康が若年の秀頼より、個人的に官位が上であっても、家格としては豊臣家が徳川家

よりも上。秀頼は現実には関白になることはなかったが、潜在的にいつでも関白に就任する可能性を秘めた存在であった。

家康は將軍就任を足がかりに、豊臣家からの政權篡奪を緩やかに押し進めたが、未だ秀吉の作った体制は健在で、徳川幕府による全国支配を貫徹させるためには、豊臣家を滅ぼし、豊臣体制を破壊しなければならなかった。そのために起こったのが大坂の陣。大坂の陣は豊臣秀頼が一大名などではなかったから起こったのである。

○説明

秀頼は公家の家格で最高ランクの摂関家の当主。これに対して徳川家康は二番目のランクの清華家の当主に過ぎず、家格では豊臣家のほうが徳川家よりも上。秀頼はいつ関白になってもおかしくない存在だった。

6.大坂の陣の時点での豊臣家と真田幸村最期の戦い

○資料

・豊臣秀吉は、死に臨んで家康に政治を委ねたが、その際、秀頼が成人したら政權を返すようにと遺言（史料 45・46）。大坂冬の陣が勃発した慶長 19 年の時点で秀頼は 22 歳。じゅうぶん政權を担える年齢に達していた。

・当時、日本と交易していたヨーロッパ諸国の評価。家康亡き後は秀忠か、秀頼か。秀頼こそは「日本の正統の皇帝」（史料 47）。

大坂の陣は、家康さえ亡くなれば、豊臣方の勝利（史料 48）。諸大名に嫌われる秀忠、大名からも庶民からも期待される人望の高い秀頼。

・慶長 20 年 5 月 7 日、大坂夏の陣最後の決戦で、三度にわたって家康本陣に突撃した幸村（史料 49・50）→最後の最後まで勝利を求めた戦いぶり。

○説明

1611 年のオランダ東インド会社の記録では、現実に政治を行っている家康を日本の「皇帝」としているものの、一方で秀頼こそが「日本の正統の皇帝」とも記している。家康はいずれ秀忠にその地位を譲るつもりだから秀忠に贈り物をするが、家康が亡くなったら大坂の秀頼が次の皇帝になるかもしれないので、彼にも同じように贈り物をしておく、と書いている。人民や大名の多くが、秀頼が皇帝になることを望んでいる、と記されていることも重要。

冬の陣真っ最中に書かれた 1614 年 12 月のイエズス会宣教師の手紙には、家康は老齡だからいつ亡くなるかわからない、家康が死んだら秀忠では諸大名に嫌われているから政權がもたないだろう、とあり、そのとき皇帝になるのは秀頼である、と断言している。

このように、大坂の陣は豊臣が負けるとわかっていた戦いではなかった。抜群のカリスマ性を誇る家康さえ亡くなれば、勝利は豊臣家の側に転がり込むと考えられていた。だからこそ幸村は三度にわたって家康本陣に突入した。家康さえ死ねば、圧倒的多数の徳川方の大軍も呆気なく崩れるだろうと考えての行動だったに違いない。幸村は最後の最後まで、勝利をあきらめなかったのである。

- (史料 1) 豊臣秀吉遺言覚書
- (史料 2) フランシスコ・パシオ書簡一五九八年十月三日（慶長三年九月三日）付
- (史料 3) アレシヤンドゥロ・ヴァリニャーノ「一五九九年度 日本年報」一五九九年十月十日（慶長四年八月二十一日）付
- (史料 4) フェルナン・ゲレイロ編『イエズス会年報集』第一部第二巻 一五九九—一六〇一年日本諸国記
- (史料 5) 島津義弘書状 慶長五年卯月八日付 島津家久宛
- (史料 6) 真田昌幸書状（慶長五年）三月十三日付 真田信幸宛
- (史料 7) 真田昌幸書状（年未詳）正月五日付
- (史料 8) 真田昌幸書状（年未詳）三月二十五日付 真田伊豆守宛
- (史料 9) 真田信繁書状（年未詳）極月晦日付 木村土佐守宛
- (史料 10) 真田信繁書状（年未詳）二月八日付 小山田老岐守宛
- (史料 11) 真田信繁書状（年未詳）六月二十三日付 左京宛
- (史料 12) 『駿府記』慶長十九年十月五・十一・十二・十四日条
- (史料 13) 「台徳院殿御実紀」慶長十九年十月十四日条
- (史料 14) 『先公実録』「左衛門佐君伝記稿」巻之一
- (史料 15) 『先公実録』「左衛門佐君伝記稿」巻之一
- (史料 16) 真田昌幸書状（慶長八年）三月十五日付 信綱寺宛
- (史料 17) 本多正信書状（慶長十六年）六月十三日付 真田伊豆守宛
- (史料 18) 『慶長見聞書』五
- (史料 19) 『真田松代家譜』乾
- (史料 20) 本多正純書状（慶長十九年）十二月十四日付 本多安房守宛
- (史料 21) 『廢絶録』
- (史料 22) 『徳川除封録』
- (史料 23) 『御湯殿の上の日記』慶長九年正月二十七日条
- (史料 24) 『時慶卿記』慶長九年正月二十六日・二十八日条
- (史料 25) 『時慶卿記』慶長十九年正月二十二日・二十三日条
- (史料 26) 『言緒卿記』慶長十九年正月二十一・二十二・二十三日条
- (史料 27) 『孝亮宿禰日次記』慶長十九年正月二十二・二十四日条
- (史料 28) 豊臣秀頼黒印状（年未詳）二月二十一日付 薩摩少将宛
- (史料 29) 豊臣秀頼黒印状（年未詳）五月朔日付 吉川侍従宛
- (史料 30) 豊臣秀頼黒印状（年未詳）七月二十七日付 米沢中納言宛
- (史料 31) 豊臣秀頼黒印状（年未詳）九月五日付 伊達侍従宛
- (史料 32) 豊臣秀頼黒印状（年未詳）十二月二十七日付 毛利宗瑞宛
- (史料 33) 熊野本宮大社釣燈籠銘
- (史料 34) 出雲大社棟札
- (史料 35) 豊臣秀頼知行宛行状写 慶長十七年九月二十八日付 毛利兵橘宛

- (史料 36) 『大坂冬陣記』 慶長十九年十一月二十八日条
(史料 37) 『義演准后日記』 慶長七年十二月晦日条
(史料 38) 毛利宗瑞(輝元)書状 (慶長八年)正月十日付 繁沢元氏宛
(史料 39) 『中山家記』 天正十六年三月二十七日条
(史料 40) 『輝元公上洛日記』 天正十六年七月二十五日条
(史料 41) 『御湯殿の上の日記』 天正十六年八月十七日条
(史料 42) 『時慶卿記』 天正十九年正月十二日条
(史料 43) 三伝奏連署状(文禄五年)五月二十四日付 徳善院宛
(史料 44) 『北越耆談』
(史料 45) フランシスコ・パシオ書簡 一五九八年十月三日(慶長三年九月三日)付
(史料 46) 『看羊録』
(史料 47) 『和蘭東印度商会史』 二
(史料 48) ヴァレンタイン・カルヴァリヨ書簡 一六一四年十二月十八日(慶長十九年十一月十八日)付
(史料 49) 『薩藩舊記』 後集三十二
(史料 50) 『山下秘録』 五

参加者との交流

【1】幸村の人柄について

・幸村が九度山から大坂城に入城した際、幸村脱出の報を受けて、大勢の追手が九度山に押しかけますが、村人たちは「3日も前に出ていかれた」と嘘をついて、幸村の脱出を助けたと聞きます。幸村は民衆から慕われていたのではないのでしょうか。

北川さん：おっしゃるように九度山の人々が幸村の脱出に協力したとする史料もあるのですが、一方で、幸村は九度山の人々を酒で酔わせ、その隙に脱出したと記す史料もあります。どちらも逸話の域を出ない史料ですので、実際がどうだったかはわかりません。

・上田市誌に幸村の国許とのやり取りが載っています。それをみると、肉親の情愛が深い人のようですが。

北川さん：肉親に対する愛情が深かったことは残されている史料からしても間違いありません。でも、どんな暴君、どんな独裁者であっても家族に対しては優しくったりしますので、肉親への愛情と人柄とは切り離して考えた方がよいと思います。豊臣秀吉についても同様です。

・昌幸は上田に奥さんを残して九度山に行ったのに、幸村は連れて行きました。これをみると幸村はやさしいのではないのでしょうか。

北川さん：昌幸が正室を上田に残していくことができたのは、昌幸の正室が新藩主の信之の実母という立場でもあったからだと思います。九度山へ連れて行くということは、奥さんや子どもまでが罪人扱いされてしまうということです。実際、幸村は九度山でたいへんな困窮に苦しんでいます。できることなら、幸村も奥さんや子どもを上田に残してあげたかったのではないのでしょうか。

【2】真田丸の場所はどこですか。

北川さん：元禄年間（1688～1704）に初めて大坂の正確な地図ができるのですが、その頃にはまだ真田丸の跡がはっきりと残っていたようで、地図にその位置が示されています。それによれば、現在の明星学園の敷地が真田丸だったようです。既に削平されてしまい、学校のグラウンドになっていますので、「真田山」と呼ばれた雰囲気はまったく残っていません。このかつての「真田山」の向いに三光神社が鎮座する宰相山があります。江戸時代の後期には、この宰相山も「真田山」と呼ばれるようになり、さらに現在は宰相山の南側の丘陵に「真田山公園」があって、こちらが「真田山」になってしまっています。本来の真田山からすると三転したことになります。

【3】大坂夏の陣の道明寺合戦の際、信繁（幸村）が後藤又兵衛と合流できなかったはなぜでしょうか。

北川さん：霧が出て、幸村の行軍が遅れたためとか言われていますが、豊臣方の予想よりも遥かに早く徳川方が着陣していたので、先鋒の又兵衛は幸村らの到着を待たずに戦闘を開始しなければならなかったのだと思います。また、大坂城から道明寺方面に向かうには古市街道と呼ばれるルートをとるのが最短距離になり、又兵衛はこのコースをとったと考えられます。一方の幸村は道明寺の南側に位置する誉田辺りに布陣する予定だったので、又兵衛とは違い、中高野街道から竹内街道を通過して誉田に向かったのではないかと思います。このルート沿いに幸村軍の伝承が残るので、そう考えています。古市街道よりもずいぶん大回りになってしまっていますが、誉田に布陣予定だったことを考えると当然のことで、作戦の失敗とかいった話ではありません。何しろ大軍が動きますので、豊臣方はいくつものルートを使って道明寺方面に向かったはずですよ。

【4】幸村が秀吉の人質になった痕跡はありますか。

北川さん：大坂にはその痕跡はまったく残っていません。幸村に関しては大坂の陣にかかわる史跡・伝承地しかありません。そうした大坂の陣の際の伝承で興味深いのは、幸村に対して好意的なものもある反面、村を焼かれてたいへん迷惑したという、幸村について批判的な言い伝えもあることです。たしかに幸村軍の進軍にともなって焼き払われた地域があるわけですが、それらの地域全てで幸村のことを悪く言うわけではありません。村落によって、どうしてそのような違いが生じるのか、これから調べてみたいテーマの一つです。

【5】大阪城に淀殿と秀頼の自害の場所があります。豊臣の大坂城は発掘されていないそうですが、どうして自害の場所がわかるのですか。

北川さん：豊臣時代の大坂城の発掘調査はいろいろと行われています。豊臣大坂城は現在の大阪城、すなわち徳川大坂城の7倍もの面積を誇りましたので、現在市街地となっている部分で豊臣大坂城の発掘調査は盛んに行われ、たくさんの成果が出ています。ただ、現在の大阪城の部分については、国の特別史跡になっていて簡単には調査ができません。それでも昭和34年に実施された大坂城総合学術調査をはじめ、部分的には発掘調査が行われています。大坂城総合学術調査では現在の本丸地下に石垣が眠っていることがわかり、その後、この地下石垣が豊臣大坂城の遺構であることが確定しました。その根拠となったのが、徳川幕府のもとで大工頭をつとめた中井家伝来の豊臣時代大坂城の本丸平面図です。この絵図は昭和35年に発見されたのですが、きわめて正確に描かれていて、現在の本丸との重ね合わせ図が作れるのです。それによって、現在の本丸のどの部分にどのような形で地下に石垣が眠っているかもわかるようになりました。秀頼や淀殿は山里曲輪の朱三櫓で自害したとの説が最も有力ですが、その朱三櫓の建っていた場所も確定できるのです。それである場所に「豊臣秀頼・淀殿ら自刃の地」という石碑が建てられました。

【6】大阪での大河ドラマ「真田丸」に関する活動や運動はどうなっていますか。

北川さん：今年は大坂夏の陣から400年、去年は冬の陣から400年でしたが、この大坂の陣400年に向けて「大坂の陣400年プロジェクト実行委員会」を組織しました。大阪府・大阪市などの行政、朝日・毎日・読売・産経・日経の各新聞社、NHK大阪放送局・毎日放送・朝日放送・関西テレビ・読売テレビ・テレビ大阪・ラジオ大阪の各テレビ・ラジオ局、JR西日本・近鉄・阪急・阪神・京阪・南海の鉄道事業者、関西経済連合会・関西経済同友会・大阪商工会議所の財界三団体、関西・大阪21世紀協会、歴史街道推進協議会、大阪観光コンベンション協会、大阪市博物館協会などの公益法人にご参加いただき、まさに“オール大阪”の組織になっています。私自身が各社・各団体をお願いにあがり、組織を作りました。現在この「大坂の陣400年プロジェクト実行委員会」では非常に多くの事業を企画・実施しており、大河ドラマ「真田丸」はその延長線上に位置づけています。

大河ドラマ「真田丸」放映の来年は、平成18年に「大阪城・上田城友好城郭提携」をむすんで10周年にもあたりますので、その記念事業を含めて、上田市とも相談をしながら、いろんな事業に取り組みたいと思います。